

ポローニア

paulownia



絵:「にじ色 Fish Family」 福富鼓哲 (附属視覚特別支援学校 小学部6年)

目次

教育局次長挨拶

巻頭言「コロナ禍でも心の密を大切に」◆濱本悟志……………2

大きく変わった令和2年度の教員免許状更新講習
◆雷坂浩之……………2

T-GAP (つくさか グローバルアクションプログラム) 発表会
◆深澤孝之……………3

幼稚部 秋の親子遠足 ◆石川千尋……………3

視覚障害とオンライン授業 ◆徳竹忠司……………4

臨時休校・分散登校中の家庭学習 ◆升野伸子……………4

附属大塚のオンライン授業について ◆若井広太郎……………5

「異なり」を知り、つながっていく『ともいき』
◆早貨千代子……………5

キャリアフォーラムをオンライン開催しました
◆河野雅昭……………6

TAMP(つくばアートメダルプロジェクト)進行中!! ◆佐藤直子…6

造形芸術科 浦安市障がい福祉課との取り組み
◆玉生美智子……………7

小学部、中学部、高等部(3学部)に分かれての運動会
◆池田 仁……………7

附属桐が丘特別支援学校 遠隔パートナー大募集……………8



コロナ禍でも心の密を大切に

筑波大学附属学校教育局 次長 濱本悟志



SATOSHI
HAMAMOTO

本誌の目的は附属学校の関係者に、幼児・児童・生徒たちがワクワクしながらイキイキと取り組む様子を伝えることです。しかし、今年度は新型コロナウイルスの感染により、その活動は大きく制限されました。4～5月は緊急事態宣言下での一斉休業、6～7月は分散登校とオンライン授業の併用、7～8月は夏季休業期間の短縮と補習授業となりました。この間、三密を避けた感染防止対策を最優先し、年度当初に作成した活動計画を大幅に変更し、すべての幼児・児童・生徒及び教職員が自粛した活動を余儀なくされました。しかし、各附属学校では身体的な接触を回避しながらも、オンライン等を活用して心の密を守り続ける活動に挑みました。その取組と工夫を本号の紙面を通して感じ取っていただければ幸いです。

9月(夏季休業後)からは、学校教育の中で「まず自分の身は自分で守り、それを周りの人の身も守る(感染させない)につなげる」を学習するため、積極的な教育活動に舵を切り替えました。そのためには、細やかな感染防止対策を講じながら、授業ばかりでなく学校行事等での一層の創意工夫が必要になります。人にとって感染症は永遠の課題です。子供たちには学校活動の中で、細菌やウイルスの感染による重篤化を防ぎつつ、共存しながら生命力を高めていく大切さを学び、それらを大人になって後世に伝えてほしいと切に願っています。

大きく変わった令和2年度の 教員免許状更新講習

附属学校教育局 教育長補佐 雷坂浩之

平成19年6月の改正教育職員免許法の成立により、平成21年4月1日から教員免許更新制が導入されました。この教員免許更新制とは、その時々で求められる教員として必要な資質能力が保持されるよう、現職の教員が10年ごとに最新の知識技能を身に付けること(各種の講習を受講すること)で、自信と誇りを持って教壇に立ち、社会の尊敬と信頼を得ることを目指すものです。

コロナ禍の影響で、本年度は、この免許状更新講習にも大きな混乱が生じました。感染防止対策のため、これまで対



聴覚障害者向け情報保障

面を主として行ってきた筑波型の講習スタイルを実施することができず、開講の予定であった115講座の内48講座の中止を余儀なくされました。また、開催を決めた講座に関しても、対面型からオンライン型に切り替えるための準備期間が必要となり、例年は6月からスタートしていた各種の講習の開始は8月からとなり、2ヶ月遅れでの開催となりました。筑波型講習の最大の特徴は、附属学校群を会場とした選択D「附属学校実践演習」ですが、特に残念だったのがこの講座のほとんどが中止となってしまったことです。また、講習の受講者も、本年度用意した定員5,395名に対し、2,130名の受講となり、受講率は何と約40%にまで落ち込みました。(令和2年10月末現在)

来年度に向けては、対面型・オンライン型双方の準備を進め、予定する全ての講座の開講を目指して準備を開始しています。これからも引き続き教員免許状更新講習事業に対する社会的な期待に答えるべく努力したいと考えています。



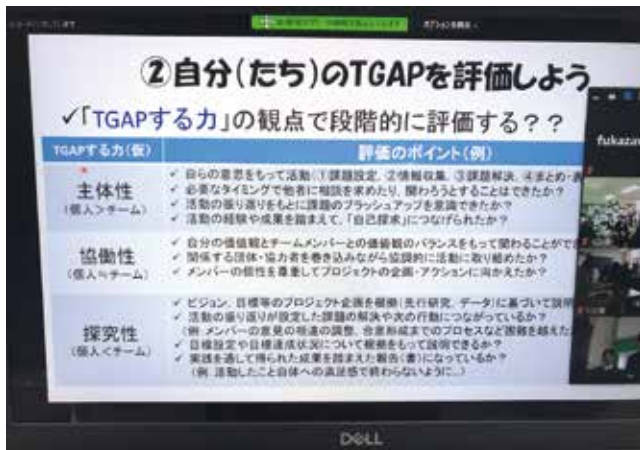
講義配信画面

T-GAP (つくさか グローバル アクションプログラム) 発表会

附属坂戸高校 副校長 深澤孝之

T-GAPは2年次2単位で実施している総合的学習の時間である。内容はグループによる課題解決活動である。10月17日に活動についての報告会を行った。T-GAPの醍醐味は学校の中だけの閉じた学びではなく、広く社会に足を運び、現地の人たちと関わり、社会の当事者となる、という点にある。その点で、今年度はコロナ禍によって社会との直接的な関わりができない中での授業開始となり、その状態は数ヶ月におよんだ。今年の発表では大きな制限を受けながら、生徒たちがどうやって外と繋がったか、という試行錯誤の過程を見ることができた。例えば「トカイ・ナカマズ」というプロジェクトでは、埼玉県吉川市の地域創生に取り組んだ。極端な人口減少に苦しむ地方の田舎だけでなく、これからは「トカイナカ」といわれる「都市部周辺の田舎」も地域創生に取り組む必要があるという課題意識を持ち、吉川市の地元企業との共同による活動展開を目指した。生徒たちの熱い思いは市長にも届き、吉川市長との意見交換も行うことができた。

生徒もそして教員も大きく成長できる活動となった。生徒達はT-GAPの活動を通じて身につけた探究活動の力を、3年次の卒業研究へ発展させていく。生徒達の成長が楽しみである。



幼稚部 秋の親子遠足

附属久里浜特別支援学校 幼稚部主事 石川千尋

9月上旬、真夏のような日差しの中、「秋の親子遠足」を行いました。例年、幼稚部の遠足は、スクールバスに乗って近隣の公共施設へ出掛けていますが、今年度は感染予防の観点から行先を変更し、徒歩で裏山グラウンドへ行きました。裏山グラウンドは、本校に隣接する国立特別支援教育総合研究所の施設です。本校では、日頃から避難訓練や運動遊びなどの活動で利用しています。



裏山の頂上にあるグラウンドを目指して、大好きなお父さんやお母さんと手を繋ぎ、片道15分程度の坂道を上ります。途中、どんぐり拾いを楽しんだり、木陰で休憩したりしながら、子供たち一人一人のペースで歩きました。グラウンドへ到着し、冷たいジュースを飲んで休憩した後は、自由遊びの時間です。青空の下、みんなでパラバルーンをしたり、シャボン玉をしたりして遊びました。広い芝生の上で、体をたっぷりと動かした後は、子供たちが朝から楽しみにしていたお弁当を食べました。コロナ禍において日常生活でも外出先が限られる中で、みんなと一緒に遊んだり、屋外でお弁当を食べたりするなど、普段とは違う特別な経験ができ、楽しい思い出いっぱいの遠足になりました。

新型コロナウイルスの影響で様々な行事が中止や縮小となっていますが、子供たちが楽しい経験を積み重ねたり、保護者が子供たちの成長する姿を実感したりすることができるように、安全面に十分配慮しながら、活動の在り方を工夫し、実施していきたいと考えています。





令和2年度の新学期の講義はonlineで始まりました。新入生達は、Zoomまたはteamsの使用を指定され、個別にPCの操作に挑んできました。視覚障害の場合その程度によりPCの環境が異なります。点字使用者の場合は、音声主体でPC操作メニューを読み上げ、自らの入力の確認も音声で行う。講義を聴きながらとなりますと複数種の音声同居することになります。弱視であれば、画面のどこにチェック項目があるのかの確認が難しいなどPC操作には障壁が沢山あります。新入生からのonline講義などの感想を掲載させていただきます。

【学生A】 私は、on-line授業について大きく2つのことを感じました。

1つ目は、講義を聴きながらボイスオーバーなどの音声操作をするのが難しいということです。「チャットを使って質問してください、手を挙げるボタンを押してください」などと言われることがありましたが、まずそれらの項目がある所に行き着くまでが大変で、その間に先生がお話した内容を聞くことができません。そのため、すべて質問は口頭にしたがり、少し操作の時間を取っていただくなどの工夫があれば、より使いやすいのではないかと感じました。

2つ目は、講義内でPowerPointなどの画像を扱う場合、

細かな説明がなければ非情にわかりにくいということです。これは対面授業でも共通して言えることでもあります。on-line上では、その場にいるわけではないため、より質問のタイミングなどがつかみづらく、ついて行くのが少し大変だと感じることもありました。

【学生B】 オンライン授業を受け私が感じたこととして、全盲では周りの人達に助けてもらえない事で、出来る事が困難となることです。

1つ目として、パソコンやスマホ等にアプリを入れる事です。音声で対応するため、取得出来ているか、必要事項が登録できているか、自分で確認したり、周りの人達に確認してもらえないので、とても困りました。

2つ目として、オンラインの授業ではネット環境により接続が安定せず、フリーズした時に対応できない事です。音声での授業では、頭で創造する事が難しいこともあり、理解するまでに何度も確認することがあり、意見を伝えることも、伝わりにくい事があります。

授業中に、フリーズしてしまったときに、何が起きているか分からず、困ってしまった事もありました。今も、オンライン授業を受けていて、全盲1人では難しいことが多くあると、私は感じました。



中学校では、5月連休明けからロイロノートを用いたオンデマンド型学習を始めました(写真1)。各教科はあらかじめ、指導計画や授業のねらいを記した学習計画表をHPにアップします。具体的な学習教材としては、パワーポイントの説明に音声を加えた動画、先生出演の授業(写真2)や実演の動画、実験の動画、課題プリント等を週ごとにアップしました。生徒は、自ら計画を立て学習をすすめ、必要

に応じて動画等を繰り返して視聴することもできました。

課題に従って、生徒は作品や提出物を、ロイロノート上に提出します(写真3)。先生に個別に質問もできます。「学校に行くより勉強が大変だった」という声も聞こえましたが、オンデマンドと双方向性を組み合わせた、「見逃しがなく、反復でき、質問も可能な」家庭学習を行うことができました。



写真1: 休校中の教育活動全体図



写真2: 5月第3週理科の動画



写真3: 家庭科 調理実習課題を写真で提出

附属大塚のオンライン授業について

附属大塚特別支援学校 主幹教諭

若井広太郎



Zoomでの合同朝会「校長先生のお話」

本校では、5月の臨時休校期間より、オンライン会議ソフトZoomを活用した授業実践を行ってきました。幼稚部から高等部まで、それぞれの学部で工夫をしながら実践を行っています。臨時休校期間は、主として朝の集まりやホームルームなどが

行われました。家庭においても、決まった時間に学習活動に参加することで、1日のリズムが整い、また教員や友達とのつながりが深まりました。また、分散登校期間では、親子のリズム遊び、ラジオ体操、学校探検、野菜の植え方や育て方、現場実習の面接練習など、さまざまな授業で活用され、登校している子どもたちと在宅の子どもたちとの学習をつなぐ重要な時間となりました。そして一斉登校となった今は、合同朝会などの集会行事について、Zoomを活用し、校内で分散をしながら行っています。司会担当、カメラ

担当、Zoomの映像や音声担当など、委員会活動として生徒が役割を分担し、運営、進行をしています。カメラ担当の生徒は、「話している人が(画面の)真ん中に来ることに気がつけているそうです。こうした新たな学校生活の様子については、本校ホームページ(<http://www.otsuka-tsukuba.ac.jp/>)でも紹介しておりますので、ぜひご覧ください。



司会担当と映像担当の生徒の様子

「異なり」を知り、つながっていく『ともいき』

筑波大学附属駒場中・高等学校

早貸千代子



附属大塚特別支援学校(小学部)との交流

通称『ともいき』は高校2年生の選択者が受講する課題研究「ともにいきる」講座のことである。この講座は「障害」をテーマに年11回の講義・体験・交流を行っている。視覚、聴覚、

肢体不自由、知的障害、自閉症、発達障害、LGBTQ+など毎回異なる内容で、当事者や家族、教育者、研究者、医師がそれぞれの観点から「障害」を語る。そこで受講生は、「障害」は医学的な面だけでなく社会や環境がもたらすことや、同じ「障害」でくられ一人ひとりの「異なり」を知る。回を重ねるごとに、彼らの中でカテゴライズされた「障害」のイメージが覆されていく。そして、「ともにいきる」にはどうしたらよいのか、考え始め、行動を変化させる。

附属学校の生徒が集う同好会「つくばこの会」を立ち上げた生徒。視覚に障害があっても一緒に科学実験ができる教材を開発した生徒。附属特別支援学校の介助ボランティアやスポーツ交流に赴いた生徒。障害理解を広める

ウェブサイトを開設したOB…、それぞれに「ともにいきる」実践の一步を踏み出している。

今年、「ともいき」受講生が、中学2年生の道徳の授業「障害とは？」で、自分たちが学んだ視点や経験知を、彼らの言葉で語ってくれた。先輩が語る「障害」は、先輩が語る「気づき」であり、教員の語る「障害」とは異なったメッセージを後輩にもたらし、刺激した。ぜひもう一度開催してほしいとの声も挙がった。

「障害」をきっかけに、自分と他者の「異なり」を知ること、自分を知ることにより、さらに「異なる」もの同士がつながっていく循環が生まれる。今後も「異なる」ものとの『ともいき』の場として、「ともにいきる」講座を続けていきたい。

ともにいきる

- ・共生社会を考える課題研究
- ・実際に障害がある人たちと交流
- ・ワークショップへの参加



障害者ってそもそも

- ・症状や大変さの覆い合いがみんな違う
- ・身近にも関わっている人がいる
- ・時代や社会の変化で障害になることも

車椅子ユーザー

体をうまく動かせない

↓

身体的な特徴
→医学モデル

階段が登れない
トイレが使いにくい

↓

まわりの問題
→社会モデル

高校生が作成した 道徳のプレゼン資料

キャリアフォーラムを オンライン開催しました

附属高等学校 図書進路部長 **河野雅昭**

本校では、お茶の水女子大学附属高校と連携して、「キャリアフォーラム」を毎年開催してまいりました。将来を見据えた高校生活を考えるための行事で、両校1年生が全員参加するものです。外部講師を招いた講演会を軸とし、お茶の水女子大学の協力を得て実施しています。

当初はお茶の水女子大学の講堂に全員を集める予定でした。ところが新型コロナウイルス感染が広がったため、オンライン開催に切り替えました。講師は当初の予定通り瀬尾拓史(せお ひろふみ)先生。医師資格を持つ、医学CG制作者です。スクリーンにスライドを映しつつ講演する場面を録画して動画ファイルにし、生徒はそれを再生する形に落ち着きました。

録画撮り場面



録画撮り場面を写真でお見せします。真ん中は講師の瀬尾先生、左手はスライドを映すスクリーン、右手は本プログラムのコーディネーターである山岸お茶の水女子大学特任准教授です。この教室後方に当日参加者が座っています。やはり聞き手がその会場にいないと話にくいのだそうです。スライドの最初の画面を合わせてお示しします。

講演の内容は、講師自身の高校時代がどのように現在と結びついたかを、具体的なエピソードを交えながら語る興味深いものでした。本校生は夏休み中に自宅で動画を見て、感想をオンラインで学校に提出するという形で参加しました。感想からも、生徒が今回の企画を自分の高校生活に活かそうとする姿勢がうかがえ、有意義な行事になったと感じております。

瀬尾先生スライド



TAMP(つくばアートメダル プロジェクト)進行中!!

附属視覚特別支援学校 教諭 **佐藤直子**

昨年度より本学の芸術組織を中心に、小・中・高・視覚の各附属校が連携する「TAMP(つくばアートメダルプロジェクト)」が立ち上げられました。



ワックス原型制作の様子(大学生はオンライン参加)

このプロジェクトは、大学芸術系と附属学校との協働で、大学教員や学生がそれぞれの専門性を活かして児童・生徒のアートメダルづくりを支援していくこと、完成したメダルを展覧会という場を設けて披露していくことなどを計画しています。

本校での活動は、小学部6年生8名、中学部3年生12名を対象として、大学の先生方や学生が加わった特別授業を設定しました。初回は、児童・生徒が様々な素材・手法で作られた参考作品に触れじっくり鑑賞しました。メダルと言えば、金属製で丸くて平らなものだと思っている児童・生徒たちは、とても驚き興味を持ちました。2回目からの活動では、ワックス(蠟)を素材として制作していきました。ワックスは温かいうちに形を作らないと固くなるため、児童・生徒もはじめは少し戸惑っていましたが、ゲストティーチャーの皆さんが、一人ひとりの自由な発想や思いを汲み取りながら作品づくりをサポートしてくれました。最後はブロンズで鑄造していただき、本格的なメダルが出来上がりました。

今秋から来年度にかけて、完成したアートメダル作品を様々な会場に展示し、展覧会が開かれます。アートメダル制作という共通のテーマでつながった附属4校・大学生・大学教員の作品との交流や、触れる鑑賞という機会は、視覚に障害のある本校児童・生徒にとって大変意義深く、期待が高まっています。



「ねこのMax」(ブロンズ)
小学部6年生作

「触れる」アートメダル展 フライヤー



造形芸術科 浦安市障がい福祉課との取り組み

附属聴覚特別支援学校 教諭 玉生美智子



2019年の秋～冬にかけて浦安市障がい福祉課と連携し「手話言語等の理解及び普及の促進に関するポスターのデザイン」を行いました。活動を行ったのは専攻科造形芸術科の1年生4名です。まず生徒たちにはポスター制作の目的を説明し、デザインする上で必要な情報は何かを考えさせた上で、浦安市について調べさせ情報を共有、その後市内の視察をしました。実際に足を運び見聞きし「新しい街と古い漁師町が共存する浦安」を知ることとなり、その相反する2つと「手話言語等」をポスター内で融合させることに苦心しながらもアイデアを出していきました。

ポスターデザインでは、クライアントを認識させること、ポスターの向こう側にいる不特定多数をイメージさせることがポイントです。「自分ではなくクライアントの主張」「自分だけでなく多くの人に魅力的な表現」に気づかせます。何回か情報を共有し、仲間のアイデアを取り入れて自身の発想の幅を広げ、各1点、計4点のデザインを完成させました浦安市が選んだ1点を印刷物にするの話でしたが最終的には4点とも力作ということで全てポスターにさせていただき、6月に実物が届きました。印刷会社でポスターとなった自分のデザインを手にしたときの達成感は大きな自己肯定感へとつながっています。

2021年には浦安市の商業施設にて掲示および配布予定とのこと。活動の締めくくりとして、可能であれば配布場所を訪れ受け取った方々の反応を生徒たちと確認しに行きたいと考えております。



小学部、中学部、高等部(3学部)に分かれての運動会

附属桐が丘特別支援学校 教諭 池田 仁



9月30日(水)～10月2日(金)の3日間、本校体育館で運動会が開催されました。今年度の運動会は、新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止の観点から、例年小学部、中学部、高等部3学部合同で行っていたものを各学部に分けて実施しました。また、保護者は参観せず配信動画を視聴する、体育館の窓やドアを開けるなどの換気や消毒を徹底するなど可能な限りのコロナ対策を行い運動会に臨みました。

9月30日(水)の小学部の運動会では、かけっこ(徒競走)、玉入れ、ポッチャ、陣取り合戦が行われました。小学部では、これまで行ってきた体育の授業の積み重ねを踏まえ選択された種目を通して、日頃の成果を発表することができました。

10月1日(木)には中学部、2日(金)には高等部の運動会では、それぞれ徒競

走、陣取り合戦、ダンス、風船リレー、紅白リレーが行われました。ダンスでは、分散登校で、十分な練習の時間をとることができませんでしたが、オンラインでお互いの踊りを見合っって意見を出し合ったり、昼休みを使って練習をしたりと工夫をしながら皆で作上げ、発表することができました。また、当日登校を自粛した生徒も、オンラインでモニターを通して体育館にいる生徒と一緒にダンスを踊ることができました。

基礎疾患を持つ児童生徒が在籍する当校としては、開催が心配されたところでしたが、十分な配慮を行うことにより、立派に運動会を開催することができる、そんなことを証明できた運動会でもありました。



